

おみくじの近代―和歌・明治維新・新城文庫『おみくじ集』

平野 多 恵

はじめに

初詣や社寺参拝の折に引くおみくじについて、いつ、誰が、どのような意図でつくったものかを考えたことはあるだろうか。おみくじは神仏のお告げだが、その成立には必ず人間がかかわっている。そう考えると、おみくじ研究は人文学の研究対象にふさわしい。

おみくじは従来、学問的に研究されることが少なかったが、ここ二十年ほどで漢詩みくじの代表である元三大師御籤を中心に研究が進展した。^{〔1〕} 本稿では、まだ研究の少ない和歌みくじについて御籤本や実際のおみくじを分析し、江戸から明治までの変遷をたどりつつ、明治維新を劃期として和歌みくじが増加したことを明らかにする。さらに、国会図書館新城文庫蔵『おみくじ集』所収のおみくじを手がかりに、明治末期から昭和初期のおみくじの実態を探り、現代とのつながりや違いを検討したい。

一、江戸のおみくじ

おみくじは神仏のお告げが、どのような形式で書かれているかで大きく三分類される。その三とは、漢詩・和歌・それ以外である。この分類は現代のおみくじについてなされたものだが、江戸時代のものにもあてはまる。以下、この三分類に従って、江戸のおみくじを簡単に概観しておきたい。

漢詩のおみくじは南北朝時代に中国から日本へもたらされたものである。観音菩薩のお告げとされる五言四句の漢詩による『天竺靈籤』が観音籤として寺院で受け入れられた^④。この観音籤は、江戸時代に徳川幕府に重用された大僧正天海が天台宗中興の祖である慈悲大師良源を信仰していたことから、観音菩薩の化身とされた元三大師と結びつき、いわゆる「元三大師御籤」として大いに流行した。十七世紀後半の寛文・延宝年間（一六六一～一六七三）以降には多くの刊本が出版された^⑤。後で詳述するが、この「元三大師御籤」は、江戸時代までは寺院だけでなく神社でも多く用いられていた^⑥。

漢詩のおみくじとしては、享保年間（一七一六～一七三五）には七言四句の漢詩からなる関帝籤も流布しており、刊本として『関帝靈籤御闡大全』（享保一〇年刊^⑧）や『関帝靈籤占』（享保一四年刊）などがある^⑨。その他、仏教系の漢詩による御籤に、宇治の万福寺伽藍堂内にある「伽藍感応靈籤」（寛文九年（一六六九）年記）や黄檗宗の隠元作とされる『靈感観音籤三十二卦占』（元禄七年（一六九四）序^⑩）、法華経に基づく『法華経御闡靈感籤』がある^⑪。

和歌のおみくじは、和歌による神の託宣歌や巫者の歌占の伝統をふまえつつ、『元三大師御籤』や易占の影響を受けてつくられたと考えられる。歌占系の御籤本の早い例が『天満宮六十四首歌占御闡抄』（以下、『天満宮歌占』）で、『宝曆四年刊書籍目録』に同書が載ることから江戸中期の宝曆四年（一七五四）には刊行されていたと知られる^⑬。この御籤は天満天神の歌占とされ、天神と十一面観音を信仰することが説かれる。これは天神が観音と同体であるという信仰を

ふまえたもので、その点でも観音籤から派生した御籤本といえよう。

阿倍晴明に仮託した『清明歌占』（刊年不明）も流布しており、『天満宮歌占』と同じく六十四首から一首を選ぶ形式で、所収和歌も一部が一致すると指摘されている¹⁴。

江戸時代には、さまざまなおいが流行した。歌占もその一角をしめ、『百人一首倭歌占』（天保一四（1843）年刊）や『百人一首歌占鈔』（花淵松濤著、嘉永元（一八四八）年刊）、『歌占図絵』（刊年不明、早稲田大学図書館蔵）など、遊戯的な性格を持つものが多い¹⁵。

そのほか、日本古典籍総合目録データベースによれば、『弁財天御歌御籤』（実蔵坊真如蔵、安政四（一八五七）年写本）があり、漢詩か和歌かは不明だが、同じく弁財天の御籤である『辨財天籤占』（元禄十一年書籍目録による）、『北辰妙見御圖抄』（佐賀県立図書館蔵）、『歓喜天御圖抄』（群馬大学蔵、写本）、『大聖歓喜天六十四籤』（京都大学蔵、明和4（1767）年刊）、『籤本』（ハーバード大学燕北研究所）などの存在も知られ、今後の調査が待たれる。

二、日本神話に基づく宣命書の和歌みくじ―『神代正語籤 全』

すでに述べたように、歌占系の御籤本は元三大師御籤や易占の影響を受けて成立したと考えられる。しかし、幕末になると、神社側が独自に創出した和歌みくじがあらわれた。それが安政六年（一八五九）の序文を持つ『神代正語籤 全』（全八十番、以下、『神代籤』と略称）である¹⁶。この和歌みくじには、上野国高崎の熊野神社に仕える高井心足による序文が付され、漢字による宣命書の表記で記祀神話に基づく和歌が記されている。序文には、この神籤は『日本書紀』と『古事記』の神代巻から言い伝えてきた神のことは八十ばかり選んだもので、熊野神社に秘蔵される太占と同じく決してはずれないと書かれ、仏教や易占の影響を排除した日本の神の占いであることが強調されている。

序文を書いた高井心足は、花屋庵鼎左・五梅庵舍用編『海内俳家人名録』（嘉永六年（一八五三）序）に「心足 一

号平花庵又白髭翁又白髭翁上毛高崎 高井左衛門太夫」とあり、俳人でもあったことが知られる。『神代籤』の表紙見返しに「白髭蔭梓」とあり、この御籤本が高井心足によって刊行されたものであったと確認できる。

書名に冠される「神代正語」は、本居宣長による古事記の注釈『神代正語』（寛政二年（一七九〇）刊）を意識したものでらう。文化十二年（一八一五）には『神代正語』の注釈として細田富延『神代正語常磐草』も刊行されている。

この『神代籤』の序文が書かれたのは、嘉永六年（一八五三）のペリー来航以後、江戸幕府が開国に揺れ、尊皇攘夷運動が活発になっていった時期である。国学の影響で日本の民族意識が高まり、日本独自の神に意識が向けられた時代に、このような御籤本が創られたことは、明治維新後に増加する和歌みくじの先蹤として注目される。

三、おみくじの明治維新

先に述べたように、宣命書の和歌による御籤本『神代籤』は尊皇攘夷運動が高まった幕末期に刊行された。『神代籤』の序文に見られた、神社独自の和歌のおみくじを創り出そうという志向は、明治維新を機にさらに明確なものとなった。それを示すのが明治三年（一八七〇）に刊行された白幡義篤編『神籤五十占』（以下、『五十占』と略称）である。その序文には次のように書かれている。

是まで神社にて仏占百番にて吉凶をみることに来り所、こたび王政復古維新の折から、両部神道御廢しになりて、神社にて仏占相用ることはいかにも思ひ、こたび出雲大社の神に折乞申て、一七日神の広前にて、神歌御さとしを蒙り奉りて、太占の心をとりにて、吉凶の御さとしを普く、天下の神社の広前に置て、今迄の仏占のごとく、世の人に吉凶の迷ひを神の御心として、知しめば諸人の助けともなりなむと、かくものするなり

明治庚午季冬 王廼舎主人識

序文によれば、明治維新以前は神社でも元三大師御籤を用いていたが、明治維新で神仏分離令が発せられて神仏習合の両部神道が廃止されたため、神社は神社にふさわしい神歌による占法を用いるべきだという。神仏分離令の影響で、それまで元三大師御籤を用いていた神社が仏教色のない神籤を必要とするようになったのである。この『五十占』は表紙見返しに「平田先生門人」と大書されることから、編者の白幡義篤は平田派の国学者と推測されている。¹⁷

これ以後、多くの神社はそれまで使っていた仏教系の元三大師御籤をやめ、神社独自の和歌みくじを用いるようになった。明治二十（一八八七）年に刊行された鷺尾里暁『神国歌占鑑』に次のような記述がある。

今七十七歳是まで神国歌占考といふものに世に弘め度思ひ、多年考を置しに、時も未だいたらず、いたづらに月日を送りしに、時なるかな、王政復古となり、御維新の際より神仏引きわけと相なり、別当は神官にかわり、是まで元三大師百御圖を世上に専ら行なはれしに、今は仏法衰へ、神社益々盛んになり、是我年来思ひし時いたれりと、この度歌占考を改正して世に弘めんと欲す。

『鷺尾略伝記』（『神国歌占鑑 乾』国立国会図書館近代デジタルライブラリー）

この歌占を著した鷺尾里暁によれば、明治維新で神仏分離となり、元三大師百御圖が世の中でもっぱら用いられていたが、今（明治二十年）は仏法が衰えて神社が盛んになったので、長年広めたいと願っていた「神国歌占考」を改正して出版に至ったのだという。この歌占をつくるにあたっては、謡曲「歌占」の歌の短冊から発想を得たことも書かれている。なお、「鷺尾略伝記」によれば、鷺尾里暁は文化八年（一八一）正月十一日の生まれで、徳島県名東郡徳島佐古村に住む士族であるという。

四、戸隠神籤の変遷

前述のように、仏教系の元三大師御籤は明治維新を契機に神社では次第に使われなくなっていくた。戸隠神社（長野）も元三大師御籤から和歌みくじへと変更したが、その時期は昭和に入ってからであった。戸隠が他の神社と異なるのは、戸隠権現が観音菩薩の化身とされ、元三大師御籤の成立と関わりが深いことであろう。延宝七年（一六七九）に胤海によって撰述された『東叡山寛永寺元三大師縁起』によれば、大僧正天海は戸隠山の神前にある観音籤を慈恵大師の像の前に安置し、信者の願いにより籤を引けば、吉凶を知らせようという夢を見たという。夢告を受けた天海は戸隠に言いかわし、神前にある五言四句の占文を竹筒にうつし、それを入れた筒を振り、筒口から出た籤で神意をうかがったとする。同書には、戸隠権現と慈恵大師とは一体で、同時に大師は観音の化身とも書かれる。元三大師が中国伝来の観音籤と結びついて元三大師御籤として流布したのは、天海の元三大師信仰と深く関わりと考えられている¹⁹。

寺院統治の面からも、天海と戸隠は深く結びつく¹⁹。天海は寛永二年（一六二五）に東叡山寛永寺を創始して天台宗統括の本拠地とし、寛永十年には戸隠山顕光寺に「越後・信濃両国天台宗法度条々」を下し、戸隠山を寛永寺の直接の支配下においた。この法度が出されたとき、戸隠別当であったのは天海の弟子とされる俊海であった。こうして、江戸幕府は修験の聖地であった戸隠山を神領として崇めると同時に、別当を支配者とする天台寺院組織に組み込んだのだった。

このように元三大師御籤との関わりが強い戸隠神社では、明治維新後も長く元三大師御籤が用いられていた。それを示すのが、『戸隠神社御籤文』跋文（長野県立図書館蔵、長野県デジタルアーカイブ推進事業「信州デジくら」で閲覧可能）である。

抑、此百籤の義は往古より戸隠神籤と申し、維新の革命にも改正を加えず、是迄講社諸君へ頒布致居候処、世の変遷に従ひ、文中多少改正を加へざるを得ざる箇所有之候。のみならず旧版は既に減版に垂んと致し候に付、講中有志諸君に改版を冀望候処、幸に賛助を得て全版上刻相成候。因て聊か報恩の爲め、製本一部宛を呈し、併て賛成員諸士の芳名を後世に残さんと欲し、左に住所姓名を顕す。

明治三十二年 信濃國戸隠神社講社聚長 宮澤瑞穂

冒頭の「此百籤」は百通りの漢詩で吉凶を判じる観音籤を指す。右の跋文によれば、戸隠神社では、観音の百籤を戸隠神籤と呼び、明治維新の際にも改正せず、戸隠神社の講員に配布していたが、世の変化に応じて文章の改正が必要となったので、戸隠講に諮って賛助を得て改訂に至ったという。

ここから明らかになるのは、戸隠神社では明治維新の後も元三大師御籤を使い続けており、明治三十二（一八九九）年にそれまで用いていた元三大師御籤を改版していることである。右の「維新の革命にも改正を加えず」の一文は、明治維新を機におみくじを改正する神社が多かったことを、はからずも示している。また、おみくじの解説文を社会の変化に応じて改訂する必要があるという記述も注目される。元三大師御籤の解説が時代にに応じて変化していることは、大野出の研究に詳しいが、この跋文には、それがはっきりと示されている。

戸隠神社は昭和七（一九三二）年までは元三大師御籤を使っていたが、昭和八年からは、「八十玉籤」という、日本神話の天地開明から神武即位までの神々の事績に鑑みて吉凶を卜する現在の形になったという。²¹ 戸隠神社において、どのような経緯でこのおみくじが採用されたかは明らかでないが、この「八十玉籤」は、先にあげた幕末の『神代籤』とほぼ同じものである。『神代籤』は後述する芳村正秉編『大中臣神祕伝 神籤活断』ともほぼ一致するが、『神代籤』が具体的な神の名をあげるのに対し、『大中臣神祕伝 神籤活断』はそれらを「天神地祇」とする傾向がある。「天神地祇」は神習教の祭神であり、意図的に改変したものと考えられる。

また、『神代鏡』掲載の和歌には、天津教開祖の竹内巨磨の伝記において、その修行中に神の託宣として感得したという歌に一致するものがある⁽²²⁾。これらがどのような関係にあるかは不明だが、いずれもが御嶽信仰と関わることを指摘しておきたい。具体的には、神習教をひらいた芳村正秉は御嶽山で修行して山岳信仰や修験の影響があり、戸隠神社も明治維新の神仏分離にもなつて戸隠山顕光寺が教派神道の神道修成派となり、その神道修成派は関東・東海地方の御嶽講員二万人を傘下に収めていた⁽²³⁾。竹内巨磨も御嶽教に入っていた時期がある。今後、継続して調査していきたい。

五、幕末・明治・大正初期の和歌みくじ

幕末から明治・大正にかけて創られた和歌みくじで、書籍や一式の形で現存するものをあげると、以下の七種がある。

- (1) 『神代正語鏡 全』一冊、全八十番、安政六（一八五九）年序、架蔵
 - (2) 白幡義篤編『神籤五十占』一冊、全五十番、明治三（一八七〇）年刊（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 - (3) 鷲尾里暁編『神国歌占鑑 乾・坤』二冊、全六十四番、明治二十（一八八七）年刊（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 - (4) 芳村正秉編『大中臣神秘伝 神籤活断』一冊、全八十番、神習教大教庁、明治三十五（一九〇二）年刊（国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
 - (5) 和歌みくじ一括、全五十番、明治期、十文字学園女子大学図書館蔵
 - (6) 女子道社製の和歌みくじ 明治三十九年（一九〇六）以後
 - (7) 岡部弥次郎著『歌占』一冊、全六十四番（大正二年（一九一三）刊、国立国会図書館近代デジタルライブラリー）
- (1) (2) (3) は先述のように、幕末から明治にかけて神社独自の和歌みくじとして意識的につくられたものである。
- (4) 『大中臣神秘伝 神籤活断』（以下、『神籤活断』）についてもすでに述べたが、(1) 『神代鏡』と同じ和歌の神籤で、

解説の内容もほぼ同じである。

(5) の和歌みくじは、書籍では知られないが一番から五十番までのおみくじが一式そろった形で現存する。このおみくじについては別稿で紹介したので詳しくはそちらをご覧いただきたい。²⁴ つくられた経緯などは不明だが、後述する新城文庫蔵『おみくじ集』に、この和歌みくじと同じものが収められており、廣田神社など、当時、いくつかの神社で実際に用いられていたことが確かめられる。

(6) は、現在も全国の神社で広く用いられている。二所山田神社の宮司宮本重胤が明治三十九年(一九〇六)に考案した和歌みくじである。二所山田神社を母体とする女子道社(山口県)は、現在に至るまで多くの和歌みくじを生み出しており、そのシェアは国内のおみくじの六〇七割とも言われる。女子道社のおみくじは、二所山田神社が発行していた女性教化用の雑誌『女子道』の発行資金を得るためのものであったと同時に、神道の宣伝メディアを意図してつくられたものでもあったと考えられている。²⁵

(7) 『歌占』は、六十四首の和歌に解説を付したものである。和歌全体の解説と、望事・病氣・待人・縁談・売買・訴訟・失物・相場・品物・サワリ・数・方位など、項目ごとの解説がある。注目されるのは、先に紹介した江戸の版本『晴明歌占』と和歌が一致することである。しかし、『晴明歌占』に見られた安倍晴明や三社託宣に関わる序文はなく、特定の神との関わりも読み取れない。宗教色の薄い歌占といえる。奥付から、著者を岡部弥次郎著、発行者を久保寺佐吉として、東京で出版されたことはいかがえるが、それ以外の情報は不明である。

六、明治末期～昭和初期のおみくじ——新城文庫『おみくじ集』

国立国会図書館新城文庫蔵『おみくじ集』は明治末期から昭和初期のおみくじ貼込帳である。²⁶ 宇宙物理学者であり東洋天文学の研究者でもあった新城新蔵(一八七三—一九三八)旧蔵の天文学・暦学関係書のコレクションの一冊で、当

時のおみくじの実態を知るために貴重な資料である。この『おみくじ集』には72点のおみくじがスクラップされている。⁽²⁷⁾ 京都や大阪など関西の社寺のものが多く、新城が京都帝国大学につとめていた明治末期から昭和初期までのものと推測される。

山口県の女子道社製のおみくじが明治三十九年に考案され、その後、広く受け入れられて、現在も用いられていることはすでに述べたが、この『おみくじ集』は、女子道社の和歌みくじが普及する以前の状況を具体的に伝えるものとして価値が高い。

所載のおみくじ72点のうち、漢詩によるものが36点、和歌によるものが25点、漢詩と和歌を併記するものが1点、その他が10点ある。漢詩のおみくじとしては、元三大師御籤が33点、関帝籤が1点、黄檗宗の隠元作とされる全三十二番の御籤が1点、近松門左衛門と広濟寺中興の祖である日昌上人が合作した御籤と推測されるものが1点、そのほかに系統のわからないものが1点ある。元三大師御籤は、四天王寺庚申堂、音羽山清水寺、どんどろ大師、大阪阿弥陀池、大津三井寺、龍谷山水間寺、天龍山、鳥啼地藏尊・貝塚上善寺、四天王寺、竹生島宝巖寺、太融寺、吾彦山、大阪日本橋大乘坊、生駒山、東大寺二月堂、妙見宮・自安寺、信貴山などの寺院のほか、天神をまつる服部天神宮のものが1点ある。関帝籤は天王寺南京寺清寿院のもので、黄檗宗の隠元作とされる全三十二番の御籤の寺社名は明らかでない（図版1）。近松門左衛門の作とされる御籤は尼崎の広濟寺境内の妙見堂から出されていたとい⁽²⁸⁾う。『おみくじ集』所収の漢詩のおみくじは、ほとんどが寺院のものだが、神社では服部天神宮のものがある。

和歌みくじ25点のうち、先述（1）『神代籤』に基づくのは4点で、宇治縣神社、住吉大社（図版2）、堀川地車稲荷神社のものがある。（2）『五十占』によるものも4点で、玉姫稲荷明神安居神社、播磨明石人丸山柿本神社、宇治神社のものがある。（5）十文字学園女子大学図書館所蔵の和歌みくじと共通するものも4点あり、今宮神社・廣田神社（図版3）・赤土大明神のものが知られる。挿絵などは省略されているが、（5）和歌みくじの和歌も今宮戎神社（大阪）や廣田神社（大阪）で現在まで用いられている。

と千日前竹林寺（図版5）は寺院のものである。

典拠不明の和歌みくじの1点「朝夕にあゆみをはこぶものならばねがへば願へ神はまもらん」（第七番吉、社寺名不明、（図版6）は、佐藤幸代が紹介する現代の玉津岡神社（京都）のおみくじ「朝夕にあゆみをはこぶものなればねがはずとても守りこそせん」（第七番吉）に酷似する。²⁸

同じく典拠不明だが、現在も新城文庫『おみくじ集』所収のおみくじと同じ和歌が用いられていることが明らかなのとして、住吉楠瑠神社の歌占がある。

その他のおみくじ10点としては、全体および項目ごとの解説が示されているものが多い。松尾神社、産湊比売許曾稲荷神社、瓢箪山稲荷神社、豊川稲荷、諏訪神社などがそれに該当する。そのうち、現在も同様に用いられているものに瓢箪山稲荷神社のおみくじがある。諏訪神社（Suwa Shrine）のおみくじは英文で、当時から英文みくじが存在していたことがわかる。

興味深いのは、おみくじのデザインは継承されたが、和歌が消えてしまった例である。白米稲荷のおみくじは、鹿や牛の肩甲骨を焼いてできるひび割れの形で吉凶を占う「太占」の骨を象った枠中に和歌や解説が描き込まれている（図版7）。骨のひび割れの代わりに文字で占いの結果を示す趣向である。先にあげた『神代籤』は、その序文に「太占の心をとりと」とあったように、いにしへの太占の代わりに宣命書きの和歌みくじが創出されたのであった。白米稲荷のおみくじのデザインは現在でも大阪天満宮で用いられている（図版8）。大阪天満宮では、骨の後ろに描かれている植物は穀（梶）の木と伝えられているという。「太占」は、国生み神話や天の岩戸神話にも登場し、日本の神が用いた占いである。「穀の木」は白和弊の材料とされる神聖な植物で、『古語拾遺』の天岩戸神話に、天日鷲神と津咋見神が穀の木を植えて白和弊をつくったと書かれる。このような太占の骨と穀をおみくじのデザインに取り込んだのは、それが太古の神の占いに遡る神聖なものであることを示したかったからだろう。なお、白米稲荷は大阪天満宮の摂社で、現在の白米稲荷では『おみくじ集』所収のおみくじとは異なる「白米みくじ」が用いられている。

以上、新城文庫『おみくじ集』所収のおみくじの概要を紹介した。寺社名や典拠が不明のおみくじも多くある。今後とも調査を続けたい。

おわりに

以上、江戸・明治・大正・昭和初期までのおみくじについて、御籤本や実際のおみくじを分析して、その変遷や実態を明らかにした。和歌みくじに関しては、幕末から明治維新が大きな劃期であった。この時期に和歌のおみくじが日本独自の神のおみくじとして意識的に創出され、それが現代の神社のおみくじにつながっている。新城文庫『おみくじ集』所収のおみくじからは、地域が関西に偏るものの、明治末期から昭和初期にかけてのおみくじの実態が看取された。

国立国会図書館の蔵書データベースで「御籤」「御籤」のタイトルを検索すると、明治維新の直後に出版された元三大師御籤本が少なく、明治末期になると再び増加する傾向が見られる。明治末期に出版が増加する傾向は法華経の御籤や黄檗宗の御籤にもいえる。明治維新の神仏分離は仏教系の漢詩御籤にも影響を与えたのかもしれない。明治期の漢詩御籤については今後の調査が待たれるが、神仏のおみくじも時代の動向と無縁ではありえない。神仏と人間は切り離せない関係にあり、時代の風に応じて変化していくのである。

現代のおみくじについて付け加えると、かつては明治三年刊の『五十占』を用いていた神社がオリジナルのおみくじに切り替える例（上賀茂神社、八坂神社など）や、その神社の御祭神や御本尊のお使いとされる動物の置物におみくじを入れたものが増えている。このような動物みくじを頒布する社寺の一例に、石清水八幡宮（鳩）、春日大社（鹿）、熊野那智大社（八咫鳥）、建仁寺摩利支尊堂（猪）、岡崎神社（うさぎ）、伏見稻荷大社（狐）、上賀茂神社（馬）などがある。水につけると文字が浮かびあがる水占も増加中で、貴船神社をはじめ、秩父神社、榛名神社などで用いられている。

凶なしのおみくじも増えており、城南宮（京都）では二〇一四年から大吉の上の「大大吉」が加えられ、おみくじを引いた人の幸福感を高めているという。³⁰ 現代のおみくじでは、神社のオリジナリティのほか、かわいらしさやエンターテインメント性、幸福感が重視され、多様化が進んでいるといえよう。

最後に、おみくじを結ぶ風習について私見を述べて終わりとしたい。元三大師御籤を用いる東大寺二月堂のおみくじ欄外には、おみくじを木に結ぶ風習に関して次のような記述がある。

此みくじは保存して下さい。もし御不用なれば堂の占に納めなさると祈念して焼きます。

木の枝、道のほとりのものに括ると、結ばれて永く思ひごとが叶ひません。

おみくじを結ぶ行為がいつから始まったかは不明だが、悪いおみくじが出たら持ち帰らずに結んでしまう人は昔も多かったのだろう。引いたおみくじを結びつける風習は現代でも広く行われているが、木の枝に結ぶと生育に差し障るため、おみくじを結ぶ場所を専用にかけているところが多い。新城新蔵がおみくじを集めた明治末期から昭和初期には、おみくじを結ぶ場所を別につくることは、まだ行われていなかったのだろう。

それにしても、二月堂のおみくじに記された「木の枝、道のほとりのものに括ると、結ばれて永く思ひごとが叶ひません」という一文は心に響く。おみくじは神仏からのメッセージであり、それを受け止めずに結んでしまつてよいのだろうか。どのような結果であつても、じっくりと読み、その意味を考え、自分の祈願や今の状態と照らし合わせて解釈して、それを自分のこれからに生かすのが、おみくじとの理想的なつきあい方ではないだろうか。

〔付記〕

本稿の校正後に、江戸から明治初期までのおみくじについて概括した中澤伸弘「みくじ」の変遷と諸相『新國字』復刊第五号（二〇一三年十月）を入手した。本稿中で参照すべき論考であったが叶わないため、あわせて御覧いただきたい。成稿に際して、おみくじの掲載を御許可くださった国立国会図書館および大阪天満宮の御関係者の皆さまに、この場を借りて御礼申しあげる。なお、本稿は平成二七年度科学研究費補助金（基盤C）「神と仏をめぐる和歌の包括的研究」（研究課題番号15K022260002）による成果の一部である。

注

- (1) 元三大師御籤については、宇津純「元三大師とおみくじ」（仏教民俗学大系8『俗信と仏教』一九九二、名著出版）、中村公一「二番大吉！ おみくじのフォークロア」（一九九二、大修館書店）、大野出『元三大師御籤本の研究―おみくじを読み解く』（二〇〇九、思文閣出版）、佐藤幸代「おみくじの歴史と変遷 元三大師みくじと歌占」（歌謡 研究と資料）第一二号、平成二四年二月）に詳しい。
- (2) 鳥武史『日本おみくじ紀行』（一九九五、日本経済新聞社／二〇〇一、ちくま文庫）。
- (3) 中国南宋の中天竺寺でつくられたため「天竺靈籤」と称する。
- (4) 司東真雄「天台寺什物の応永銘「観音籤」考」（『元興寺仏教民俗資料研究所年報』一九七六）に書かれる応永十六年（二四〇九）の天竺靈感観音籤が日本で年代の知られる最も古いものである。
- (5) 二又淳「元三大師御籤本一覽原稿」（『近世文芸 研究と評論』第六一号、二〇〇一）。
- (6) 注1宇津論文に指摘がある。
- (7) 注1宇津論文。注1中村著に、関帝籤は延宝四年（一六七六）に中国から渡来した僧・樵雲心越が長崎の崇福寺に伝えたのはじめとある。
- (8) 大野出「『元三大師御籤緒鈔』考」（『日本語と日本文学』三三、二〇〇一・二）に詳しい。

- (9) 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代 書林出版書籍目録集成(三二)』(一九六三年)による。
- (10) 『宝暦四年刊書籍目録』掲載「観音三十二掛占」も同じものか。
- (11) 法華経に基づくおみくじについては、芹澤寛隆『法華経』と御鬮』日本思想史学会パネルセッション「思想史としてのおみくじ」口頭発表(二〇一三・一〇、於東北大学)で詳細な報告がなされた。
- (12) 拙稿「『予言文学』としてのおみくじ」(小峯和明編『予言文学』の世界)二〇一二・二二。
- (13) 注9『江戸時代 書林出版書籍目録集成(三三)』所収。『古典籍総合目録』には宝永(一七〇四)頃初版かとある。『宝暦四年刊書籍目録』には「天満宮六十四首歌占」のほか、「八卦秘密箱」「御伽智恵占」「清明秘伝袖鏡」「新選八卦諺解」「同拾穂抄」「百籤和解」「天神籤」「紫式部千種占」「歌占萩乃八重垣」「小野小町風雅占」「天時占候」「観音三十二掛占」が見え、宝暦四年(一七五四)の時点で、さまざまな古い書が出版されていたことが知られる。
- (14) 太田正弘「おみくじ」の源流に就いて―「歌占」本の紹介―(『書籍文化史十七』二〇一六・二)。「清明歌占」については、拙稿「歌占の世界」(『書物学』5号、勉誠出版、二〇一五・七)でも紹介した。
- (15) 江戸の歌占本の一覧は注12拙稿参照。一覧に追加すべき歌占本に、写本「哥うら」(個人蔵)、享和一(一八〇一)年刊『歌占萩の八重垣』(天理大学附属図書館、京都大学図書館谷村文庫蔵)がある。写本「哥うら」については久保木秀夫氏からご教示いただいた。江戸の歌占本についての詳細は別稿を期したい。
- (16) 注12拙稿、拙稿「おみくじ なぜ和歌が書かれるのか」(成蹊大学人文叢書第一二巻『データで読む日本文化』高校生からの文学・社会学・メディア研究入門)、風間書房、二〇一五)。中澤伸弘「おみくじと出版」(『日本古書通信』二〇一二・四)も、この御籤本の存在に触れている。
- (17) 注1字津論文。
- (18) 注1字津論文。
- (19) 以下の説明は、『戸隠信仰の歴史』第四章「戸隠神領の成立と展開」第一節(古川貞雄執筆、一九九七、戸隠神社発行)。
- (20) 注1大野著。
- (21) 注19『戸隠信仰の歴史』第四章第八節(二澤久昭執筆)99～101頁。同書168頁に戸隠神社神籤の写真が掲載されている。『神代籤』

とほぼ同じ内容だが、解説部分の「戸隠権現（神代正語籤）」が戸隠神籤では「香嶋の大神」となっている。

- (22) 長峯波山『竹内巨磨伝』（八幡書店、一九八七（初版一九二二）、竹内義宮『竹内巨磨伝 デハ話ソウ』（一九七二）。董航氏の調査による。

- (23) 井上順孝『教派神道の形成』（弘文堂、一九九二）、注19書第三章「旧衆徒と戸隠神社」168頁。

- (24) 拙稿「明治時代のおみくじにおける和歌表現―附十文字学園女子大学蔵「和歌みくじ」翻刻―」（『十文字学園女子大学短期大学部紀要』43、二〇一三・二）。

- (25) 小平美香「機関誌『女子道』の発行をめぐる 山口県における近代女子教育と宗教」（『学習院女子大学紀要』17号、二〇一五・三）。拙稿「恋の占い―おみくじ文化」（『国文学 解釈と教材の研究』二〇〇七年十一月号）や注12拙稿で現代の女子道社のおみくじについて紹介した。

- (26) 拙稿14「歌占の世界」に写真付きで紹介した。

- (27) 注1字津論文は所収のおみくじを六十八点と数える。

- (28) 注1中村著。

- (29) 注1佐藤論文。

- (30) 佐藤剛志「大大吉、凶なし…おみくじ様変わり 不安な世相を映す？」（朝日新聞デジタル、二〇一六年一月三日記事。www.asahi.com/articles/ASHDK0C89HD0C89HDJPLZB01R.html）。